

心象スケッチ

春日抄

日はうらうらと燃えちぢれ 花菜畑を私は歩む
人生既に半ば いまこの途上に佇つて
古い感情も叫ばず 想ふ事すべて平明
囀鳥しきり 佇ずみ 花粉にまみれ
うつらうつらと私は歩む

いのちの友

彼の書齋に灯がはいる 書架一鉢黄水仙
彼は人生を嘲ふ 彼は文学を罵倒する
片方きりの眉毛がちよと動く
さうして彼は聲を上げて読む フロオベエルの書簡
ああそのやうな日もありき 北條よ
わが盲ひて 物想ふ宵

春の虹

お尻を振り首を振り 躓き乍ら沼に飛入る家鴨達
そのの向うの堤の上を電車が走る
新療地区に雲を割つて日ざしが立つ
望郷臺にほつかり架つた春の虹

青畳

向ひの丘に雲雀啼き 陽炎燃えて燈籠一基
さてわが寮は 床間とこに一幅 花鳥の図
仄やかに爽やかに 匂ふ備後の青畳

軒におとなふ熊ん蜂
いま友は読書の後 気軽な昼寝
偽足を脱いで枕にする

啞蝉

夏の日の沈黙の佳人 樹間隠れの啞蝉よ

お前は神さまの不浄物 美しい不具者 私の精神^{こころ}

さうして私の貧しい歌は この哀れな啞の蝉
心で啼いて歌はれず

(昭和十二年「山桜」七月号)